世界名作劇場

プリンセス

小公女セーラ

『涙の中の悲しみ』（仮）

第 21 話

制 作 日本アニメーション
フ ジ テ レ ビ

脚本中西隆三

登場キャラクター（第二十一話「雨の中の決心」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
アーメンガード
ロッティ
ラビニア
ジェシー
ガートルード

モリー

ジェームス

雨ガッパの男

野菜店の主人

（衛兵）

メル（ネズミの末ッ子）

エミリー（人形）

シーザー（猫）

1 ミンチン女学院・地下の洗濯場

女生徒たちの山のような洗濯物を懸命に洗っているセーラ。

――振鈴が聞こえて来る。

セーラ、手をとめ、汗と後れ毛を拭う。

セーラ「授業が終ったんだわ」

2 同・廊下

振鈴を鳴らすアメリア――

3 同・教室の前

ドアが開き、教科書を抱えたミンチンが出て来る。

×　　　×　　　×

続いて出て来るラビニア、ジェシー、ガートルード。

ラビニア「じゃ、あとで私の部屋に来て」

ガートルード「うん、私、お菓子持って行くわ」

ジェシー「私もよ、ラビニア」

ラビニア「待ってるわ」

ラビニア、ひと足先に去る。

ジェシーとガートルード、ふと背後の戸口に立尽しているアーメンガードとロッティに気づく。

ジェシー「なによ。あんたたちも、ラビニアの新しい部屋見たいって訳？」

アーメンガード、慌てて首を振る。

ガートルード「フン、招待されてるのは、私たちだけよ。さ、行きましょ」

ジェシーとガートルード、駆け去る。

取り残されるアーメンガードの袖をロッティが引く。

ロッティ「ね、アーメンガード……」

アーメンガード、ロッティを見る。

ロッティ「セーラ・ママがいたお部屋、ラビニアがとっちゃったの？」

アーメンガード「（困る）と、とったんじゃないけど……ラビニアは、

特別寄宿生になって、あの部屋に移ったのよ」

ロッティ「（泣き顔）わァ、やっぱり、セーラ・ママのお部屋とった

んだ。私、ラビニアの部屋なんて見たくないもん……」

アーメンガード「ロッティ……」

アーメンガードも悲しくなる。

4

同・三階の廊下

お菓子の包みを手に駆け上って来るジェシーとガートルード。

特別室のドアの前に来て、はっとなる。
中から、ラビニアの怒る声と、ベッキーの声——
ラビニアの声「なによ、このお掃除のしかた……部屋中メチャメチャじゃないの」
ベッキーの声「そ、そんな……私、一生懸命お片附けしたんです……」
顔を見合わせるジェシーとガートルード。
いきなりドアが開き、掃除道具を手にしたベッキーがラビニアに追い出されて来る。
ベッキー「あの、私、も一度お掃除し直しますから」
ラビニア「あんたじゃ駄目。も少しましなメイドがいる筈でしょ」
ベッキー「えっ……」
ラビニア「ほら、お友達が来ちゃってるじゃない。早く呼んで来なさいよ」
ベッキー、ジェシーとガートルードを見たが、頭を下げ、仕方なく去る。

見送って、ニヤリとジェシーたちを見るラビニア――

ラビニア「フフ、これで面白い事が始まるわ」

顔を見合せるジェシー、ガートルード。

5

同・地下の洗濯場

洗濯を続けているセーラ。

ベッキーが、泣き顔で入って来る。

セーラ「ベッキー……どうしたの?」

ベッキー「ラビニアさんが……私の掃除が気に入らないんです」

セーラ「まあ……またなのね」

ベッキー「(頷く)もっとましなメイドがいる筈だから、呼んで来いって」

セーラ「えっ……」

ベッキー「お嬢様のことを云ってるんです」

セーラ、凝然と考えたが、
セーラ「判ったわ」
ベッキー「え……?」
セーラ「私がお掃除に行くわ」
ベッキー「い、いけません、お嬢様……あの人たちは、みんなしてお嬢様を笑い者にしようとしてるんです」
セーラ、微笑でベッキーから掃除道具をとる。
セーラ「大丈夫よ、ベッキー……メイドとして働くのは、私の仕事ですもの。じゃ、お洗濯をお願いね」
セーラ、出て行く。
ベッキー「お嬢様……」
心配そうに立尽して見送るベッキー。

6 同・三階の廊下

掃除道具を手に階段を上って来るセーラ。
ドア前に行き、ふっとためらう。
—— 中からラビニアたちの笑い声。
セーラ、思い切ってノックする。
ラビニアの声「どうぞ」
セーラ、ノブを押す——

7 同・ラビニアの特別室

ドアを開け、そっと入るセーラ。
×　×　×
新しく成金趣味で飾り立てられた家具調度、ジュータン
—— そのテーブルを囲んで菓子を食べていたラビニア、
ジェシー、ガートルードがニヤリと見迎える。
セーラ「ベッキーの代りに、お掃除に……」

ラビニア「（ニヤリ）来ると思ってたわ」
ジェシー「さすが、元代表生徒」
ガートルード「今は、代表メイド」
どっと笑うラビニアたち――
ラビニア「さ、はじめて頂戴」
セーラ、無言で三人を見返す。
ラビニア「どうしたの。ここはあなたが前にいた部屋よ。様子は判ってる筈でしょ」
ジェシー「フフ、ラビニアの荷物がこんなに沢山入ってるから、見違えたかも知れなくてよ」
笑う三人
ラビニア「さ、早く掃除しなさいよ」
セーラ「ホコリになるわ」
ラビニア「平気よ。私、あなたが私の部屋を掃除する所を見ていたいの」

傍の安楽椅子に移り、豪然と坐る。
ラビニア「さ、早くして」
笑うジェシーとガートルード。
セーラ、見返したが、無言で辺りを掃除しはじめる。高慢気に見るラビニア。
ジェシーとガートルード、悪のりして顔を見合せると、菓子の粉や紙を床に払う。
ジェシー「まあ、ここもこんなにゴミが落ちてるわ」
ガートルード「ラビニア、折角のお部屋がだいなしよ」
ラビニア「（ニヤリ）ここもですって」
セーラ、手をとめ、三人を見返す。
ラビニア「なによ、その顔」
セーラ「お掃除は、あなたたちがいない時にしておくわ」
ラビニア「なんですって」
セーラ「私を困らせるつもりでいるなら、今お掃除をしても無駄です

もの」

かっと安楽椅子から立上るラビニア。

ラビニア「私たちに、出て行けって云うのね」

セーラ、無言で見返す。

ラビニア「判ったわ。憶えてらっしゃい……さ、行きましょ」

ラビニア、ジェシーとガートルードを促すと荒々しく部屋を出て行く。

見送ったセーラ、吐息すると、床に膝つき、菓子の粉や紙を掃き拾う——

8 同・廊下

ドアが開き、掃除を終えたセーラが道具を手に出て来る。

アメリアが階段を駆け上って来る。

アメリア「あ、セーラさん、院長先生がお呼びですよ」

セーラ「え、院長先生が……」
不吉な予感に顔を曇らせるセーラ。

9 同・一階の廊下

降りて来るアメリアとセーラ――停る。
×　×　×
院長室のドアが開き、出て来たラビニア、ジェシー、ガートルードが、セーラを見てニヤリとすると、逃げるようにすり抜けて駆け去る。
見送ったセーラ、掃除道具を壁に置くとアメリアに続いて、院長室へ――

10 同・院長室

入って来るアメリアとセーラ。

デスクからミンチンがジロリと振返る。

ミンチン「ラビニアさんから聞きました。特別室の掃除をおこたった
　　そうですね」

セーラ「いいえ。お掃除はきちんと致しました。ごらんになって頂け
　　ればお判りだと思います」

　　ミンチン、激昂する――

ミンチン「セーラ！……お前は自分の掃除のあとをこの私に点検しろ
　　と云うんですか」

アメリア「お、お姉様……」

ミンチン「あなたは黙って！……セーラ。ラビニアさんは、この学校
　　の大切な特別生徒です。そのラビニアさんに反抗するよう
　　な真似は今後一切許しませんからね」

　　じっとミンチンを見返すセーラ。

ミンチン「な、なんです、その眼は……アメリア、この子を連れ出し

アメリア「は、はい、お姉様……」
　　　　なさい。それからモリーとジェームスをお呼び！」

11 同・廊下

　出て来るセーラとアメリア――セーラ、掃除道具をとると静かに去る。
　心配気に見送ったアメリア、呼ぶ。
アメリア「モリー……ジェームス……！」

12 同・裏庭

　洗い終った洗濯物を洗濯桶に山と積んで運んで来るセーラ、桶を置き、息をつく。
　戸口から同じように桶を運んで来るベッキー、心配気に

セーラに寄る。

ベッキー「ほんとに、申訳けございませんです。お嬢様……」

セーラ、振返る――

ベッキー「私の事で、お嬢様まで院長先生に」

セーラ「(微笑)いいのよ、ベッキー……さ、洗濯物を干してしまわなければ」

ベッキー「は、はい、お嬢様……」

二人、ロープに洗濯物を干しはじめる。

13 同・院長室

ミンチンの前に、来ているモリーとジェームス。

ミンチン「いいですね。あの子は徹底的にしめつけてやる必要があります。遠慮は無用です」

モリー「はい、院長先生」

ジェームス「そう云う事でしたら、思い切りたっぷりと、へえ……」

14 同・地下の台所

セーラの前に、モリーとジェームス。

モリー「いいかい。お前のお蔭でこっちまで院長先生にお目玉を喰っちまったんだからね。もう容赦はしないよ」

じっと見返すセーラ——

ジェームス「さあさあ、早く買い出しに行って来るんだ！」

ジェームスを見返したセーラ、買物の籠を手にとると静かに出て行く。

ジェームス「ふん、返事もしやがらねえで」

モリー「全く気持の悪い子だよ。じっとひとの顔を見返してるだけなんだから」

一方に心配気に見送っているベッキー。

15 高架鉄道の下

豪然と通過する蒸気機関車と列車――

×　　×　　×

その下を篭を手に行くセーラの姿――

16 コベントガーデン市場の一角

空荷車を片附けているピーター、悄然と来るセーラに気づく。

ピーター「あ、お嬢さん……（駆け寄る）」

セーラ「（顔をあげ）ピーター……」

ピーター「どうしたんです……馬鹿に顔色が悪いけど、なにかあったんですね」

セーラ「え、ええ、ちょっと……」

ピーター「聞きますよ……おっと、その前に買物を片附けちまわなくちゃね」

セーラ「ええ、有難う、ピーター」

17

ウォーター・ルー橋の上

ウォーター・ルー橋の上遠く外国船の汽笛。

野菜の籠を手にしたセーラと、ピーターがじっとテームズをみつめている。

ピーター「畜生、そんな事があったんですか」

必死に感情を押えているセーラに、

ピーター「お嬢さん……院長先生やラビニアさんにそこまで嫌がらせをされて、なぜ我慢してなきゃならないんです」

セーラ、微かに首を振る

セーラ「私……ひとに、軽蔑されたり、いじわるされたりした時、い

つも、お父様のことを想い出しているのよ……」

セーラ、押えていた激情がこみ上げ、涙が溢れる。

セーラ「今の……今の私には……それしか、耐える方法はないのよ……

……」

ピーター「お、お嬢さん……！」

——ボウッと、再び鳴る汽笛。

（中 C M ）

ミンチン女学院・台所

買物篭からゾロリと卓に転がした野菜類を点検するジェームス。脇にモリーと、前に買物から帰ったばかりのセーラ。

ジェームス「(ジロリ)なんでえ。肝心のジャガイモが抜けてるじゃねえか」

セーラ「あの、この書きつけには、ジャガイモは書いてありませんでしたけど」

ジェームス「なにィ」

いきなりセーラの手から紙片を引ったくると確かめる。

脇からのぞき込むモリー。

ジェームス、憮然とモリーと顔を見合せたが、

ジェームス「フン、書いてなくたって、口でちゃんと云ったんだ。すぐに行って買いたして来い」

その時、一方から取り込んだ洗濯物の山を抱えて入って来たベッキーが、

ベッキー「あの……セーラさんは、お昼もまだ食べてないんです。買い出しは、私が行きますから」

ジェームス「うるせえ、お前は引っ込んでろ……さあ、早く行って来るんだ」

セーラ「はい、ジェームスさん……」

セーラ、買物篭を取ると、出て行く。

心配気に見送るベッキー――

モリー「一寸あんた、ほんとはジャガイモを云うの忘れたんだろ」

ジェームス「（ニヤリ）余計な事云うなって……どっちにしろ、俺たちはあいつをこき使うように院長先生に云われてるんだぜ」

モリー「あんたもズルくなったねえ」

ジェームス「へへ、お前さんのおかげだよ」

笑うモリーとジェームス――を、離れたベッキーが凝然と見守っている。

ひょいとモリーが窓を見て、

モリー「あ、降って来たよ……ベッキー、ボヤボヤしてないで、早く洗濯物を取り込むんだよ」

ベッキー「は、はい、ただいま……」

慌てて洗濯物を置き、裏手へ――

19 小さな教会の前の道

小さな教会の前の道、降る雨。

小走りに行き交う人々の中で、びしょ濡れで立尽すセーラ。

セーラ「困ったわ……急がなくては」

セーラ、ずぶ濡れで道を急ぐ。

20

コベントガーデン市場の一角（夕景）

コベントガーデン市場の一角降る雨。

来るセーラ、茫然と見廻す。

既に、店々は閉店し、人影はない。

途方に暮れるセーラ――

× × ×

セーラ、来る。

一隅で、雨ガッパを着た男が、空箱を片附けている。

セーラ、近づく。

セーラ「あの……」

雨ガッパの男が振り返る。

セーラ「ピーターは、どこにいるんでしょうか」

男「ああ、ピーターなら、とっくに帰っちまったよ」

セーラ「帰った……？」

男　「ああ、この雨じゃ仕事にならんからな。なにか用かい」
セーラ「いいえ、あの……それでは、どこかジャガイモを売っているお店はないでしょうか」
男　「無理だな。こんな時間に来たって……どこももう店を閉めちまってるぜ」
セーラ「困ったわ」
男　「ま、セントジェームス市場へ行きゃ、開けてる店があるかも知れんけどな」
セーラ「セントジェームス市場？」
男　「なんだい、お前さん、ロンドンの事はなにも知らんと見えるな」
セーラ「は、はい……」
男　「リーゼントストリートの南の外れだ。ここからはちょいとあるけどな」
セーラ「有難うございます」

21

附近の道（夕景）

附近の道降る雨と泥の道。
来るずぶ濡れのセーラ、足をとられまいと、探しながら来る。
一瞬、泥道に片方の靴が脱げる。
はっとして、拾おうとした時、一方から走って来る馬車

――

セーラ、思わず道ばたに身を引く。
御者の怒号と共に、バシャッとセーラに泥水をはねて通過する馬車――その車輪が泥中に残ったセーラの靴を轢く。
はっと見たセーラ、馬車が通り過ぎるやいなや、駆け寄って拾い上げる。
――パックリと底革がはがれた靴。

セーラ、茫然とみつめる。

22 別な道（夕景）

雨の中を——片手に野菜篭、片手に破れた片方の靴を下げて来るセーラ。

その裸足の片方は、既に泥にまみれている——

23 セントジェームス市場の一角（夕景）

野菜店の主人が店じまいをしている。

セーラの声「あの……」

主人、振返る。

ずぶ濡れで立っているセーラ。

セーラ「ジャガイモを少し頂けないでしょうか」

主　人「あン？」

　　　ジロリとセーラの風体を見直す。

　　濡れて張りついた髪や粗末な服、片手に提げたボロ靴—

　　　——

主　人「フン、うちにゃ、めぐんでやるような品物はないよ（仕事に

　　かかる）」

セーラ「いえ、あの、お金は持ってるんです」

　　　主人、振返り、疑わし気に見直す。

主　人「ほんとうだろうな」

　　　セーラ、頷いて、掌のコインを示す。

主　人「なんだ。ひでえなりしてるから、一文なしかと思った。じゃ、

　　分けてやろう」

セーラ「す、すみません……」

24	
ポールモール通り	

雨の中を馬車が行き交う――
その道ばたを、ジャガイモの野菜篭を抱え、こわれた靴を提げて来るセーラ。

25 セントジェームス宮の裏手

来かかるセーラ、ふと足を停める。

× × ×

黒い熊毛の帽子に真紅の上衣の近衛衛兵（クイーンズ・ライフ・ガード）が、着剣銃を支え、不動の姿勢で雨の中に立っている――

× × ×

セーラ「あの衛兵さんも、じっと我慢しているんだわ」

セーラ、思い直して、その衛兵の前を通りかかる。
一瞬、裸足の片足が割石に引っかかり

セーラ「あっ……」

野菜篭ごと石畳みに突んのめる。転り散るジャガイモ。
セーラ、慌てて拾い、篭の中に入れはじめる。
×　　×　　×
不動の衛兵の眼だけが、キロリとセーラの方に動き、また戻る。
いきなり衛兵は、銃を片手にセーラに駆け寄りざま、空いた左手で素早くジャガイモを拾っては、セーラの篭に入れる。
驚くセーラ——入れ終った衛兵、突然はっと持場へ飛び返ると、捧げ銃をする。
官内から上官らしい騎馬の近衛兵が、蹄音を轟かせて出て行く。
再び捧げ銃をおろす衛兵——その眼だけが心配そうにセーラの方へ動く。
セーラ「あ、有難うございました」

衛兵の眼が微かに笑うと、また正面に向き、彫像のように動かなくなる。
セーラ、ほっと微笑して、もう一度衛兵に頭を下げると、雨の中を歩き出す。

26 ミンチン女学院・表（夕景）

篭を手に、血と泥のにじむ裸足の片足をひきずって帰って来るセーラ——
その脇を、水しぶきをはねて通りすぎた辻馬車が、玄関前に停ると、外出帰りらしいミンチンとラビニアが買物包みを抱えて降り立つと、急いで中に消える。
×　　×　　×
見送ったセーラ、吐息すると、地下への階段へ——

27 同・地下の台所（夜）

篭から卓に転がされるジャイモ―― をジェームスがひとつ取り、匂いを嗅ぐ。

ジェームス「なんだ、こりゃ……腐ってるじゃねえか」
セーラ「えっ……」
モリー「なんだって？……そんなもの押しつけられて来たのかい」
セーラ「す、すみません。気がつかなかったんです」
ジェームス「このまぬけめ。早く行って取りかえて来い」

一方からベッキーが駆け寄る。

ベッキー「そんな……セーラさんが可哀想です。私が行って来ます」
ジェームス「うるせえ。お前にゃ夕食の仕度があるんだ」
セーラ「私、行ってきます」
モリー「お待ち！……今頃ノコノコ行ったって、店が開いてる筈がないじゃないか」

ジェームス「そんな事云うけど、どうする気だよ、この腐れジャガイモ……院長先生に大目玉くらうのは、まっ平だぜ」

モリー「仕様がない……これがなくなるまで、お前たち二人に食べさせてやるからね」

驚くベッキーと――見返すセーラ。

モリー「またその眼つきかい……今夜の食事は抜きだからね！」

ジェームスとモリー、出て行く。

一方で見守っていたベッキーが駆け寄る。

ベッキー「お嬢様……」

セーラ、吐息で顔をあげる――

28

同・三階の廊下（夜）

同・三階の廊下眠っていたシーザーが立上る。

階段を、重い足で上って来るセーラと、一歩遅れていた

わるように続くベッキー。
セーラの片手には提げたボロ靴――
二人、奥の屋根裏階段口へ――
×　×　×
特別室のドアが開き、寝室着のラビニアがニヤリと見送る。

29 同・屋根裏部屋の前（夜）

上って来るセーラとベッキー。
ベッキー「お嬢様、お風邪を引きませんように……」
セーラ「あ、有難う、ベッキー……」
セーラ、自室のドアへ――
心配気に見送るベッキー、自室へ――

30

同・屋根裏部屋（夜）

入って来たセーラ、ボロ靴を床に置き、がっくりとベッドに掛ける。

ふと、壁穴から、出て来る子ネズミのメル——前足をあげて、セーラを見上げる。

セーラ、肩を落し、そっとメルに語りかける。

セーラ「ごめんなさい……今夜は、あなたたちに、なにも持っては来られなかったの……我慢してね」

——首を傾げるメル。

セーラ、置かれた父母の写真額と、並んだエミリーに眼を移す——

セーラのN「お父様……私、まだくじけてはいないわ……どんな事があっても、我慢していくつもりよ……」

——その眼に涙が光る。